5/7
赤旗

今を生きる子どもたち ⑤

貧困と格差の拡大のなかで

「1人でがんばらなくていい」

「おまえら全員死ね。おとななんかみんなクズだ」。そういって包丁を振り回す。支援団体の職員Mさんに出会ったばかりのフミト（13）は、まわりのおとなを攻撃し、布団に潜って涙を流していました。

家族は孤立して

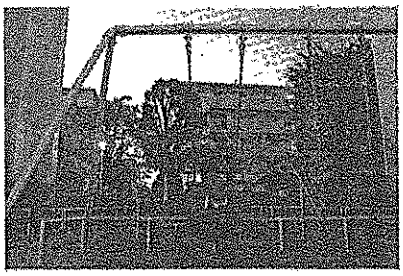
2歳違いの兄と40代の母親には知的障害がありました。2人とも障害者手帳を取得していなかったため、障害福祉の制度を利用できず、家族は孤立して生きてきました。

1人で兄弟を育てる母親は、攻撃的な言動で周囲を「敵」にし、仕事はどれも長続きせず、生活保護を受けていました。アパートの部屋は床も見えないほど散らかり、食卓にはコンビニ弁当やカップめんの空容器が山積みになり、コタツをつけたまま外出して子どもが脱水症状を起こしたこともありました。

この家庭では子どもの健全な成長は期待できないと行政に判断され、児童相談所が母子分離の方向で介入しようとしました。福祉事務所のケースワーカーに支援を要請されたMさんが家庭を訪問すると、「子どもが連れて行かれてしまう」と泣き叫ぶ母親の姿がありました。母親の家庭教育力はぜい弱で、子どもたちの生活は乱れていましたが、Mさんは「この家族は母親の愛情で守られている」と感じました。

泣きながら訴え

何度も訪問して時間を共有し、母親に「お母さん、がんばってきたよね」と声をかけ続けました。ある日、フミトが泣きながら訴えてきました。「お母さんとお兄ちゃんはバカだし、おれがいくらがんばったって、家きれいになんないじゃん。こんな家、友だち呼べないじゃん」



ブランコを高くこいで

「そうだねフミト、うんとがんばったね。お母さんもがんばってるよね。これからは家にお友だち呼べるように、いろんな人の力を借りてMと一緒に部屋の片付けしよう。もうフミト1人でがんばらなくていい」。月4回ほどの訪問を重ね、1年以上かかって、親子がMさんに笑顔を見せるようになりました。

Mさんは、福祉事務所のケースワーカーや児童相談所、学校のスクールソーシャルワーカーたちと連携し、母親と兄の障害者手帳を取得。福祉のサポートが受けられるようになりました。2人とも不登校気味でしたが、学校での人間関係も少しずつ改善し、落ち着きが見られるように。

母親はいま、初めて一つの職場で2年以上続けて働けています。「私たちのこと、こんなに考えてくれた人、いない」とMさんを頼る母親。

「子どもたちを育てる自信もなくて、施設に入れられたら自分は死のうと思っていた」とMさんに打ち明けました。

出会いから4年、夕暮れの公園に兄弟の声が響きます。「Mの番だよ、早く」。ブランコを高くこいで靴飛ばし。「やったあ、Mの勝ちだね」とMさん。冷え込んできたにもかかわらず、「お風呂を洗ってたから」と裸足にサンダルで出てきた母親が、ブランコの光景を見て笑います。

「おかしな子たちだね。ああ、おかしい」

「きょうは終わり。またね」と車に乗り込むMさんを見送る3人の影が、暗がりのなかに溶けていきました。

（文中仮名。おわり）